

現代韓国語のアスペクト形式 <-ko iss- > の意味分析 —日本語の「-ている」との比較の観点から—

金京愛

1 はじめに

1.1 本論文の目的

現代標準韓国語¹ (以下、韓国語と略す) には、<-ko iss- > と <-e iss-² > の二種類のアスペクト形式がある。そして、<-ko iss- > と <-e iss- > 形式は以下に示す意味の違いがある。

- (1) yenghuy-ka wuntongcang-ul talli-ko iss-ta.

ヨンヒが 運動場-を 走っ-ている

「ヨンヒが運動場を走っている。」

- (2) kenmwul-i mwuneci-e iss-ta.

建物-が 崩れ-ている

「建物が崩れている。」

(1) はヨンヒが運動場を走っているところであるという運動中の状態を表しており、(2) は建物が崩れた後の状態を表している。

このように <-ko iss- > が用いられる構文は基本的に「進行」、<-e iss- > が用いられる構文は基本的に「結果状態」の意味を表すとされていた。

しかし実際には (3) のように、

- (3) yenghuy-ka mwun-ul yel-ko iss-ta.

ヨンヒが ドア-を 開け-ている

「ヨンヒがドアを開けている。」

¹ 韓国語のアルファベット転写は Yale 式を用いる。また、他の論文からの引用であることを明示している例以外は、ここで用いられている例文のほとんどは筆者（筆者の出生地は忠清南道天安という地域であり、天安方言はイントネーションや語尾の点でソウル方言と異なるが、若い人達の方言はそれほど激しくない。）による作例であるが、例文の容認度の判断については金善美氏（出身地は釜山広域市であり、家庭ではソウル方言を使う。）の意見を参考にした。

² <-e iss- > は、母音調和により <-a iss- > で実現されたり、母音縮約により i+e→ye になること、また、a+e→ay になることがある。そして、同じ母音が連続する場合には一方の母音が省略され <-ø iss- > で実現される。ここでは、これらの異形態も一括して <-e iss- > で表記する。

ドアを開けた結果、ドアが開いた状態にある「結果状態」の意味を表す場合にも〈-ko iss-〉が用いられる場合もある³。また、(4)のように、

(4) a. yenghuy-ka cihachel-ey tha-ko iss-ta.

ヨンヒ-が 地下鉄-に 乗っ-ている

「ヨンヒが地下鉄に乗っている。」

b. yenghuy-ka cihachel-ey tha-e iss-ta.

ヨンヒ-が 地下鉄-に 乗っ-ている

「ヨンヒが地下鉄に乗っている。」

〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉のどちらの形式を使っても、ヨンヒが地下鉄に乗った後の状態に解釈され、意味の違いがないようにみえる場合がある。

本論文では、これらの二つの形式が表す意味や両形式がどういった基準で用いられるのかということについて解明することを目的とする。その際には、日本語のアスペクト補助動詞「-ている」に関しても同時に考察を行いつつ、韓国語との比較対照を試みる。そして、これらの形式が表す意味を動詞の意味構造と関連付けて分析・記述していく。

1.2 本論文の主張

1. 〈-ko iss-〉は「運動や動作の過程」かつ「主体 (= 主語) によって維持されている状態」という意味を表し、〈-e iss-〉は「状態変化を被った対象が状態変化後にある」という意味を表しており、その意味は動詞の意味によって具体化し表現される。
2. 〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉は動詞が表す全体の意味から部分的なインターバル (= interval) を指す役割を果たす。参照時 (= reference time) の位置によって、〈-ko iss-〉や〈-e iss-〉のインターバルの意味が決まる。
3. 〈-ko iss-〉は日本語と異なりパーフェクトの意味を表す用法がないことから start time < reference time < reset time であると一般化できる。
4. 状態変化動詞の〈-ko iss-〉や〈-e iss-〉の後接可能性は、状態変化を受ける対象の振る舞いに左右される。それに対して日本語の「-ている」の後接可能性は状態変化を受ける対象の振る舞いに左右されない。

1.3 動詞の表す諸局面とインターバルの意味

まず、議論を進める上で前提となる用語の説明をする。本論文では、森山 (1988: 141) に従い動詞の表す一連の動きやその動きのもたらす結果がどのような在り方をしているの

³ これはドアを開けるという動作の最中としての解釈であってもよい。

か、ということを「局面」という用語で表す。

その局面を表す動きが運動として展開している期間であれば「過程」、動きの結果の保存が主体的に行われるのであれば「維持」、動きの結果が持続的であれば「結果持続」と分けて使う。

また、本論文では「局面」と区別して「インターバル」という用語を用いる。例えば、「過程」、「維持」、「結果状態」といった意味の変化が起こり始めて、再び意味の変化が起こるまでを「局面」とし、「過程」の局面から一部分だけを表すような時間の幅を指す場合には「インターバル⁴」という用語を使う。

以下、2章で従来の先行研究を紹介し、従来の研究では解決できない問題点を指摘する。3章では〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が用いられる環境や条件を明らかにし、2章で指摘した問題点に説明を与える。その際に日本語のアスペクト形式「-ている」との比較を行う。最後に4章で本論文をまとめる。

2 アスペクト研究の流れ

本章では韓国語におけるアスペクトの先行研究の流れを確認し、その後日本語におけるアスペクト研究を概観する。

2.1 アスペクトの意味

Comrie (1976) は、アスペクトを「場面の内的な時間構成をみるさまざまな方法である」と定義している⁵。本論文では、「内的な時間構成をみる」というのは、どの局面を取りあげるかによって表される意味が異なる可能性があるということを示していると考える。

では、以下で韓国語における〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の一般的な先行研究の流れを見ていく。

2.2 韓国語の〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の研究

韓国語におけるアスペクトの研究において動詞と関連付けた具体的な研究には油谷 (1978) がある。油谷 (1978) は動詞に〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が付くか付かないかを基準

⁴ Dowty (1979) では、インターバルについて、「Let T , which we will intuitively regard as the set of moments of time, be the set of real numbers. ... I is an *interval* iff $I \subset T$ and for all moments t_1, t_2, t_3 , if $t_1, t_3 \in I$, and $t_1 \leq t_2 \leq t_3$, then $t_2 \in I$. (Intervals have no internal gaps.)」と説明しているが、本論文ではインターバルを $t_1 < t_2 < t_3$ と考えており、瞬間はインターバルとしていない。なぜなら、本論文では〈-ko iss-〉が事象の全体から view を制限して表すその部分を「インターバル」としているが、〈-ko iss-〉は瞬間を指すことができないからである。

⁵ ...'aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation'(Comrie 1976: 3).

とし、「状態性」、「結果性」、「瞬間性」などのアスペクト素性を用いて動詞分類を行った。その後、Lee Chengmin⁶ (1994), Ko Yengkun (2004) でさらに精緻化された。従来の研究では、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が動詞の語幹に後続すると基本的にはそれぞれ「進行」と「結果状態」の意味を表すとされてきた。

しかし、Ko Yengkun (2004) では以下のような例文をあげ、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の機能を「進行」と「完了（本論文では「結果状態」）」の意味だけでは明確に区別することができないことを指摘している。

- (5) a. ton-ul paykwon kaci-[**ko iss**/***e iss**]-ta. (Ko Yengkun 2004: 311)
 お金を 百円 持っている
 「お金を百円持っている。」
- b. ton-i paykwon nam-[***ko iss**/**e iss**]-ta. (Ko Yengkun 2004: 311)
 お金が 百円 残っている
 「お金が百円残っている。」

(5) の動詞 kaci-ta (持つ)、nam-ta (残る) は両方とも結果を表す瞬間動詞として、完了の意味を表している。ところが、(5a) の kaci-ta (持つ) は他動詞として〈-ko iss-〉だけが後続でき、〈-e iss-〉は後続できない。一方 (5b) は、自動詞として〈-e iss-〉は後続できるが〈-ko iss-〉は後続できない。このように Ko Yengkun (2004) は、〈-ko iss-〉には進行と結果状態という多義的な機能が付加されており、〈-e iss-〉には結果状態を表す機能しかないことについて述べているが、その原因が歴史的な変化の過程にあるというだけで、実際に〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の両形式がどのような意味で使い分けされているのか、また両形式が動詞とは別にどのような機能をしているのかについては説明されていない。

また浜之上 (1992a) は、特にパーフェクトに関して詳細な観察を行っているが、同論文でパーフェクトは先行する動作と後続する状態という2つの時間的平面 (temporal plane) を含む動詞の形式（もしくは動詞句）にのみ適用されると定義している。そして、後続する時間的平面が強調される状態の意味を「状態パーフェクト」と呼んでいる。浜之上 (1992a) の定義に従うと、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が表す「結果状態」は「状態パーフェクト」になる。さらに、パーフェクトの意味は動詞の語彙的な意味の制約の有無から、その違いが見られるとし、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が表すそれぞれの局面の意味も動詞の語彙的な意味の制限の有無によってその違いが見られるという見解を示している。しかし、その動詞とは別に〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉形式はそれぞれどのような機能を持っているのか、そ

⁶ 韓国語で書かれている論文の場合の著者名の表記も基本的には Yale 式アルファベット表記法を用いる。しかし、当該論文著者が使っているアルファベット表記がある場合にはそのまま引用する。

してどのような動詞に <-ko iss> が後続して、どのような動詞に <-e iss> が後続するのかという条件については説明されていない。

野間・村田・金 (2004) および野間・金 (2004)⁷でも <-ko iss> と <-e iss> 形式が表す意味の違いに関して観察しており、特に <-ko iss> に関しては、今「…している」のでいつかは「…しなくなる」、「…し終わる」ような動作を用いることが多い」と述べている。<-ko iss> が「終了点」をもつということは、本論文で <-ko iss> が「開始・終了を持つ事象の内部であることを表す形式である」という観察と同じ問題に着目していると考えられる。しかし、野間・村田・金 (2004) および野間・金 (2004) では <-ko iss> がもつ終了点の意味については言及されておらず、そして、両形式を区別する根拠についてもほとんど議論されていない。なお、<-ko iss> と <-e iss> による「終了点」の違いに関しては 3 章で後述する。

次節では、日本語の「-ている」に関する先行研究をみる。

2.3 日本語のアスペクト形式「-ている」の研究

本節では、まず Igarashi and Gunji (1998) の枠組みを紹介し、次に田窪・三藤・澤田 (2004) の一般化を取り上げ、韓国語との違いを説明する。

Igarashi and Gunji (1998) では、動詞の Proto-Lexicon⁸が持っている時間的概念を start time (以下 s と略す)、finish time (以下 f と略す)、reset time (以下 r と略す) の三つの時点を利用して説明している。例えば、以下の例文、

- (6) 健は今隣の部屋で着物を着ている。
- (7) 健は今朝からずっとあの着物を着ている。
- (8) 健はあの着物を 3 年前に着ている。

において、それぞれの文は以下のような時間的局面を表すとされる。

- (6) : 服を着用する動きの始めと終わりの間の局面 (= view⁹ < s, f >)

⁷ これらは韓国語の学習書である。

⁸ …most verbs regularly exhibit this kind of multiplicity of temporal meanings, a unified approach would be to assume the existence of a common *proto-lexical item* for each set of verbal lexical items; each of the ordinary lexical items is related to the common proto-lexical item by a kind of lexical rule. The *proto-lexicon*, which lists proto-lexical items, defines the temporal parameters for each proto-lexical item …(1998: 82)

⁹ a view corresponds to a portion of the duration of an event that could be description by various uses of the proto-lexical item (as lexical items) (Igarashi and Gunji 1998: 81).

- (7) : 服を着用する動きの終わり (f) から原初の状態に戻る (r) までの間の局面 (= view $\langle sf^{10}, r \rangle$, where $r > sf$)
- (8) : 脱衣の時点 (r) 以降の局面

また、動詞が持つ sfr の時間的流れは以下のように説明されている。

(9) temp $\langle s, f, r \rangle$ where $s \leq f \leq r$

つまり、動詞には sfr という3つの時点があり、その時間的流れは sfr 順であることを示している。

view には2種類があり、それぞれの時点が同時でない $s < f$ 間を「basic view」で表し、 $sf < r$ 間を「resultative view (結果状態)¹¹」で表す。それぞれの view は動詞がもつ時間的な素性 (= temp) から一部を取り出す場合に使う。

Igarashi and Gunji (1998) では、動詞に後続して動詞のアスペクトの意味を変えるような補助動詞「始める」、「続ける」、「終わる」、「しまう」、「かける」との共起可能性の有無で r の可視性 (= visibility) や、また sf 間が同時か $s < f$ であるかを区別している。

3章で、Igarashi and Gunji (1998) の枠組みに従いつつ、二種類のアスペクト形式がある韓国語に合わせて Igarashi and Gunji (1998) の枠組みを修正して分析を行う。

田窪・三藤・澤田 (2004) では、「-ている」だけでなく日本語の時制とアスペクトについて総合的に記述・考察している。その中で「-ている」形については、

(10) $s < rt$ (= reference time)

と一般化している。

(10) は、これまで「進行相」、「結果相」を区別して説明してきた先行研究とは違う立場をとっている。

しかし、韓国語の (-ko iss-) は reset time 以降の局面¹²を表す用法がないので、田窪・

¹⁰ ここで、sf は start time と finish time が時間の幅を持たない一つの時点として解釈されていることを表す。

¹¹ Igarashi and Gunji (1998) では、結果状態の局面を表す際に $sf < r$ と表記しているが、ここでは「結果状態」局面を表す場合に「 $f < r$ 」と表記する。なお、 $s = f$ は s と f が同時であることを $s < f$ は s と f が同時でないことを表している。これについては4.2節で再び取り上げる。

¹² 以下、「パーフェクト (= Perfect)」と呼ぶ。ここでパーフェクトは、現在と切り離された出来事が過去にあったという意味である。森山 (1988) では「…経験、経歴のような意味、つまり、一度そういうことがあったということを問題にするような意味でしかありえないということ」と説明されているが、ここでも同じ意味として考えてもよい。したがって、ここで用いる「パーフェクト」の意味は工藤 (1995) の「パーフェクト」よりもより単純な概念である。

三藤・澤田 (2004) のこの特徴づけは韓国語の〈-ko iss-〉に対しては当てはまらない。

次章では、〈-ko iss-〉の意味を記述・分析していく。

3 韓国語の〈-ko iss-〉形

本章では、韓国語のアスペクト形式〈-ko iss-〉について、同じ韓国語のアスペクト形式〈-e iss-〉および日本語の「-ている」と比較・対照しながらそれぞれのアスペクトの形式がどのように異なり、どのように共通しているかをみていく。

3.1 〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の分析

ここでは〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の意味を明らかにしていくために、「過程」の局面をもつかどうか、「結果状態」の局面をもつか否かを基準に動詞を以下の4種類に分ける¹³。

1. 「過程」と「結果状態」の両局面をもつ動詞。

例) (mwun-ul) yel-ta「(ドアを) 開ける」、(os-ul) ip-ta「(服を) 着る」、(ppallay-lul) nel-ta「(洗濯物を) 干す」など。

(11) yenghuy-ka mwun-ul yel-ko iss-ney. pismwul tuleka-nuntey.

ヨンヒ-が ドア-を 開け-ているよ 雨水 入っていく-のに

「ヨンヒがドアを開けているよ。雨水入るのに。」

これはドアをゆっくり開けているという「過程」の意味にもなり、ドアをすっかり開けているという「結果状態」の意味にもなる。このように (mwun-ul) yel-ta「(ドアを) 開ける」は、再帰的¹⁴な状況ではないのにも関わらず両義的な解釈を受けている。〈-ko iss-〉が後続し「進行」と「結果状態」のどちらの意味も表すことができるという問題に関しては、Yang Jeongseok (2004) も指摘している。本論文でも、Yang Jeongseok (2004) と同様に再帰的状況は両義的な解釈をうけるための必要条件でも十分条件でもないと考え。従って本論文では、

- 語彙レベルで「過程」と「結果状態」、両局面をもつ状態変化他動詞であれば、〈-ko iss-〉は両義的な解釈が可能である。

と考える。

¹³ Vendler (1967) では、動詞を activities, achievements, accomplishments, states の四つに分類している。より詳しい分類の基準などについては Vendler (1967) を参照。

¹⁴ また、(ppallay-lul) nel-ta「(洗濯物を) 干す」も再帰的な状況ではないのにも関わらず両義的な解釈が可能である。なお再帰性に関しては野間・金 (2004) に従って、「客体に働きかけた主体の動作が主体自身に返ってくるような動作を表す他動詞である」と定義する。

この「両義的な解釈を受ける」構文については、sfr という概念を使って 3.2 節で再び取り上げる。

2. 「過程」の局面だけをもつ動作 (activity) 動詞。例) ket-ta 「歩く」、ilk-ta 「読む」、yoliha-ta 「料理する」、mek-ta 「食べる」、ssu-ta 「書く」、chiwu-ta 「片づける」など。

(12) akka ponikka yenghuy pang-eyse chayk ilk-[ko iss/*e iss]-tela.

さっき 見たら ヨンヒ 部屋-で 本 読んでいたよ

「さっきみたら、ヨンヒ部屋で本読んでいたよ。」

これは、本を読むという動作の最中であることを表している。

3. 「過程」の局面が瞬間的に行われており、「結果状態」の局面を表す達成 (achievement) 動詞。

例) (kapang-ul) tul-ta 「(カバンを) 持つ」、(hayntul-ul) cap-ta 「(ハンドルを) 握る」、(pwul-ul) kku-ta 「(電気を) 消す」、cwuk-ta 「死ぬ」、anc-ta 「座る」、kyelhonha-ta 「結婚する」、se-ta 「立つ」、ssek-ta 「腐る」など。

(13) a. ceki nay chinkwu-ka mwukewun kapang tul-[ko iss/*e iss]-ney.

あちら 私の 友達が 重い 鞆 持っている

ppalli kapoca.

はやく 行ってみよう

「あそこに私の友達が重い鞆を持っているよ。はやく行ってみよう。」

b. way pwul kku-[ko iss/*e iss]-e? etwuwuntey.

何で 火 消しているの 暗いの

「何で電気を消しているの？暗いの」

(13a) は鞆を手を持った後の状態を表しており、(13b) は、電気を消した結果、暗くなっている状態を表している。これらはどちらの例文も <-ko iss-> が後接され「結果状態」の意味を表している。

4. 「過程」や「結果状態」の局面を表すことができない動詞。

例) nolla-ta 「驚く」、talm-ta 「似る」など。

(14) a. *ttuspakkey sosik-ul tut-ko nemwu nolla-[ko iss/e iss] -eyo.

思いかけない 知らせ-を 聞いて とても 驚いて-ます

「思いがけない知らせを聞いてとても驚いています。」

b. ttuspakkey sosik-ul tut-ko nemwu nolla-ess -eyo.

思いかけない 知らせ-を 聞いて とても 驚く-過去 -ます

「思いがけない知らせを聞いてとても驚きました。」

nolla-ta 「驚く」は、s, f, r がすべて瞬間的に終わってしまうので、それぞれの局面を持っていない。この場合は、<-ko iss-> も <-e iss-> もつけることができない。

nolla-ta「驚く」などのように動作が瞬間的に終わってしまうような動詞は、韓国語では過去形を使って表す。森山 (1988) では、このように瞬間的に終わるような動詞を指して「無変化一点的」と呼んで、動詞句の意味自体では何も変化するものではなく、無変化的な動きであると説明している (森山 1988: 154)。

- (15) a. *eme, ne appa manhi talm-[ko iss/e iss] -kwuna.

まあ ぼく 父ちゃん たくさん 似てい -ね

「まあ、ぼくお父さんにかなり似てるね。」

- b. eme, ne appa manhi talm-ess -kwuna.

まあ ぼく 父ちゃん たくさん 似る-過去 -ね

「まあ、ぼくお父さんにかなり似てるね。」

talm-ta「似る」の場合、それぞれの開始時点と終了時点が明確ではないため似始める時点や似終わる時点、似ている状態が続いてる変化後の「結果状態」の局面を決めることができない。この場合にも、〈-ko iss-〉や〈-e iss-〉をつけることができない。これらの動詞を韓国語では「過去形」を使って表す。一方、日本語では過去形を使うことはできず、「-ている」形を用いる¹⁵。

以上の点から、〈-ko iss-〉や〈-e iss-〉が用いられるためには、動詞の意味が以下のような条件を持っていなければならない。

1. 動作が瞬間的に終わってはいけない
2. 開始時点、終了時点が明確でなければならない

なお開始時点や終了時点が明確でないというのは、以下のことが言えないということが客観的な判断の基準になると思われる。

- (16) a. *talmki sicakhata

似る 始める

「似始める」

- b. *ta nolla-essta

すべて 驚く-過去

「驚き終わった」

ここで注目しておきたいのは、以下のように「過程」の局面が瞬間的に行われており、「結果状態」の局面だけを表す動詞類の場合である。

¹⁵ 韓国語には、金田一 (1976) で言われているようないわゆる「第四種の動詞 (例えば、似る、聳えるなど)」はない。

- (pwul-ul) kku-ta 「(電気を) 消す」、(kapang-ul) tul-ta 「(カバンを) 持つ」、(hayntul-ul) cap-ta 「(ハンドルを) 握る」、cwuk-ta 「死ぬ」、anc-ta 「座る」、se-ta 「立つ」、ssek-ta 「腐る」

これらの動詞類は、「結果状態」を表すのにそれぞれ違う形が後続できる。

- (pwul-ul) kku-ta 「(電気を) 消す」、(kapang-ul) tul-ta 「(カバンを) 持つ」、(hayntul-ul) cap-ta 「(ハンドルを) 握る」などの動詞には、〈-ko iss-〉が後続する
- cwuk-ta 「死ぬ」、anc-ta 「座る」、se-ta 「立つ」、ssek-ta 「腐る」などの動詞には〈-e iss-〉が後続する

次節では、「結果状態」の場合に違いが見られるこれらの「状態変化動詞」を中心に観察を行う。なお Igarashi and Gunji (1998) では、 $f < r$ が設定される条件について詳細には取り上げられていない。以下では、Igarashi and Gunji (1998) における動詞分類の修正を行いつつ、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の違いを明らかにしていく。

3.2 状態変化動詞

Igarashi and Gunji (1998) ではインターバルをもつ fr 間が設定される（すなわち、 $f < r$ となる）条件や環境については詳しく論じられていない。ただ、状態変化動詞の場合だけ $f < r$ になると設定していることから、状態変化をもつ動詞であれば $f < r$ が設定されると予測できる。しかし、韓国語では「壊れる」、「溶ける」などの状態変化を受けた対象が元の状態に戻ることが不可能である「復帰不可能状態変化自動詞」と、「(電気を) 消す」や「(鞆を) 持つ」などの「復帰可能状態変化他動詞」の間において違いが見られる。本節では、状態変化をもつ他動詞を「壊す」類と「消す」類、「開ける」類に分けて、状態変化動詞でも $f = r$ になる場合があることや、状態変化の後の状態が復帰可能か復帰不可能かによってもその振る舞いが違うことを指摘する。日本語だけに限定するのではなく、韓国語との比較において動詞が語彙的に持つ s, f, r のうち特に r を再定義することで状態変化をもつ自動詞も同じように説明することを試みる。

まず、復帰可能状態変化他動詞の例を取り上げる。

- (17) a. yenghuy-ka mwun-ul yel-ko iss-ney. pismwul tuleka-nuntey.
 ヨンヒ-が ドア-を 開け-ているよ 雨水 入っていく-のに
 「ヨンヒがドアを開けているよ。雨水入るのに。」
- b. *yenghuy-ka mwun-ul yel-e iss-ney. pismwul tuleka-nuntey.
 ヨンヒ-が ドア-を 開け-ているよ 雨水 入っていく-のに
 「ヨンヒがドアを開けているよ。雨水入るのに。」

(17a) は、ヨンヒがドアを開けた結果、今ドアが開いている状態にあることを指すこともドアを開ける動作を行っている過程を表すこともできる。

次に復帰不可能状態変化他動詞文をみてみよう。(17) が「過程」と「維持」の両方の意味を表すのに対して、(18) はひとつの意味しかもつことができない。

- (18) a. emma-nun cikum pwuekh-eyse nayngkwukswu-ey ssul elum noki-ko iss-eyo.
 母さん-は 今 台所-で 冷やし麺-に 使う 氷 溶かし-ています
 「お母さんは今台所で冷やし麺に使う氷を溶かしています。」
- b. *emma-nun cikum pwuekh-eyse nayngkwukswu-ey ssul elum noki-e iss-eyo.
 母さん-は 今 台所-で 冷やし麺-に 使う 氷 溶かし-ています
 「お母さんは今台所で冷やし麺に使う氷を溶かしています。」

(18a) は、氷を溶かしている最中である「過程」の意味を表している。

- (19) a. pemin-i cungke-lul epsay-ko iss-ta.
 犯人-が 証拠-を 消し-ている
 「犯人が証拠を消している。」
- b. *pemin-i cungke-lul epsay-e iss-ta.
 犯人-が 証拠-を 消し-ている
 「犯人が証拠を消している。」

(19a) は、犯人が証拠を消す動作の最中である「過程」の意味を表している。

これは、状態変化をもつ他動詞の場合でも、それぞれの動詞が持っている語彙的な時間の意味が異なっていることを示していると考えられる。例えば、(17a) は主体の働きでドアを開けるという過程の局面、および、開けたドアを主体が開いた状態で維持している局面を表している。一方、(18a) や (19a) は氷を溶かしている過程、証拠を消している過程の局面しか表すことができない。つまり、ここでは状態変化の後の対象が元の状態に復帰可能であるかどうかが問題になっているのである。(17a) は原状復帰される時点まで主体によって結果状態が維持されていることを表している「原状復帰可能の動詞」であるのに対し、(18a) や (19a) は主体によって結果状態が維持されることがない「原状復帰不可能の動詞」なのである。そしてその場合は {-ko iss-} によって結果状態の維持という局面を表すことができない。

では、次に状態変化をもつ自動詞について考えてみよう。

- (20) a. mwun-i yelli-ko iss-ney. pakk-ey palam-i sey-key pwu-napwa.
 ドア-が 開いて-いるよ 外-に 風-が 強く 吹く-みたい
 「ドアが開いているよ。外で風が強く吹いているみたい。」

- b. mwun-i yelli-e iss-ney. pismwul tuleka-nuntey.

ドアが 開いて-いるよ 雨水 入っていく-のに

「ドアが開いているよ。雨水入るのに。」

<-ko iss-> が後接する (20a) は少しずつドアが開いていく過程を表しているのに対して、<-e iss-> が後接する (20b) はドアを開け終わってその結果ドアが開いた状態にあることを表している。

次の例文も、同じように解釈することができる。

- (21) a. mwe-hay. aisukhulim nok-ko iss-canha. ppalli mek-e.

何-する アイス 溶け-ているじゃないの 早く 食べ-なさい

「何してるの。アイス溶けているじゃないの。早く食べなさい。」

- b. eme aisukhulim-i ta nok- e iss-ne. nayngcangko kocangna-nkeanya.

あら アイス-が 全部 溶け-ているよ 冷蔵庫 故障し-たんじゃないの

「あら、アイスが全部溶けているよ。冷蔵庫、故障しているんじゃないの。」

<-ko iss-> はアイスが徐々に溶けていく過程を表しており、<-e iss-> はアイスが冷蔵庫の中で全部溶けてしまって、液体になった状態を表している。

- (22) a. *cungke-ka epseci-ko iss-ta.

証拠-が 消え-ている

「証拠が消えている。」

- b. *cungke-ka epseci-e iss-ta.

証拠-が 消え-ている

「証拠が消えている。」

epseci-ta「消える」は、消えている最中であるという過程のことも消えた結果状態のことも表すことができない動詞であるため、(22)の例が示している通り<-ko iss->も<-e iss->も後接することができない。このことは、「*epseci-ki sicakha-ta. (消え始める)」や「*kyeysok epseci-ess-ta (消え続ける)」が言えないことから裏付けられる。このような動詞の場合、状態変化後の局面を表すためには、韓国語では以下のように「過去形」を使って表さなければならない。

- (23) cungke-ka epseci-ess-ta

証拠-が 消える-過去

「証拠が消えた¹⁶。」

¹⁶ 日本語では、「証拠が消えている」は容認可能である。

ここまで「状態変化動詞」を中心に、以下のような観察を行った。

- 動詞の語彙的な時間概念と 〈-ko iss-〉 や 〈-e iss-〉 との関係はなにか
- 「動詞の語幹 + 〈-ko iss-〉」または「動詞の語幹 + 〈-e iss-〉」が表す意味はなにか
- 二種類のアスペクト形式はどのような役割をしているのか
- どのような条件の元で 〈-ko iss-〉 あるいは 〈-e iss-〉 が後続しうるのか

日本語を中心に分析を行った Igarashi and Gunji (1998) では「状態変化動詞」であれば $s < f < r$ であるという見解を示していたが、韓国語では状態変化動詞であっても $s < f = r$ である場合があることがわかった。韓国語との比較という観点から考えてみると、「状態変化動詞」がもつ時間的語彙概念構造が言語によって違うことが明らかになったと思われる。

韓国語では、主体の振る舞いが違うことが 〈-ko iss-〉 や 〈-e iss-〉 の後接可能性の原因になっている。

それぞれの状態変化を持つ自動詞が示す主体の振る舞いを整理すると、以下のようになる。

- (20) の「yelli-ta (開く)」は主体である「ドア」が状態変化を被っており、(21) の「nok-ta (溶ける)」は主体である「アイス」が「アイスの状態」から「液体の状態」になって主体の状態が変化している。「epseci-ta (消える)」の場合は主体である証拠があった状態からなくなった状態に変化している。

これらの動詞の中では、「epseci-ta (消える)」だけ 〈-e iss-〉 で「結果状態」を表すことができない。

以上をまとめると次のことが言える。

主体の状態変化後の状態を表す 〈-e iss-〉 が付く（つまり、状態変化が起こるところから r までを想定する）ためには、以下のような条件が必要になる。

- 状態変化を被った主体が「残っていなければならない」ということが必要になる。つまり、「yelli-ta (開く)」では状態変化を被った主体である「ドア」が「nok-ta (溶ける)」では状態変化を被った主体である「液体状態になったアイス」がそれぞれ残っているため、〈-e iss-〉 が後接できる。しかし「epseci-ta (消える)」では状態変化を被った主体である「証拠」がなくなっているため 〈-e iss-〉 が後接できない。つまりこれは「yelli-ta (開く)」や「nok-ta (溶ける)」のように主体の存在自体が残っていなければならない、消えてしまっていないことを示している。

Igarashi and Gunji (1998) では、日本語の「状態変化動詞」の場合、「状態変化動詞」であれば「ている」で「結果状態」の意味を表すことができることから「状態変化動詞」が均質的なものとして扱われてきた。しかし以上の点から窺えるように韓国語では主体の振る舞いの違いが <-ko iss-> あるいは <-e iss-> の後接可能性の原因になっており、同じ状態変化動詞であっても「消える」などの動詞においては <-ko iss-> あるいは <-e iss-> をつけて「結果状態」を表すことができないことがわかった。

ここまでの考察に基づいて、Igarashi and Gunji (1998) でリセットタイムを表す r に関しては以下のように再定義して使う。

- (24) 「状態変化した対象が再び状態変化するまで」が $f < r$ になり、「再び状態変化をする」その時点が r である。

このように、Igarashi and Gunji (1998) の r を現象に基づいて再定義することで状態変化他動詞、状態変化自動詞、それぞれの動詞が示す fr 間の違いが明らかになった。韓国語の <-ko iss-> は 2.3 節でもふれたように r 以降の局面を表すような用法がない。

- (25) a. *yenghuy-nun samnyencen-ey ttak hanpen i kil-ul ket-**ko iss**-ta.
 ヨンヒ-は 3 年前-に たった 一回 この道-を 歩い-て-いる
 ヨンヒは、3 年前に一回だけこの道を歩いている。
- b. *yenghuy-nun samnyencen-ey ttak hanpen i os-ul ip-**ko iss**-ta.
 ヨンヒ-は 3 年前-に たった 一回 この服-を 着-て-いる
 ヨンヒは、3 年前に一回だけこの服を着ている。

韓国語の <-ko iss-> が後接する (25a) は 3 年前にあった出来事を表すことができない。(25b) も同様に過去に一度服を着たことがあるという意味を表すことはできない。一方、日本語の「-ている」は 3 年前に一度この道を歩いたことがあるという事実を表すことも、3 年前に一度この服を着たことがあるという事実を表すこともできる。このように日本語の「ている」では「過程」の局面、「結果状態」の局面、現在と切り離された過去の出来事(=パーフェクト)までもを表すことができる。このことから田窪・三藤・澤田 (2004) では日本語の「ている」を以下に一般化する。

- (26) $s < rt$

つまり日本語の「ている」は現在から切り離された過去にあった出来事を表すことができ、すべての動詞において参照時 (= reference time) が事象の終了後にもくることができるので、動詞の種類に関係なくパーフェクトの意味を出すことが可能である。しかし韓国

語の〈-ko iss-〉は「パーフェクト」の意味を表すことができないため、以下のように一般化するのが妥当である。

(27) $s < rt < r$

つまり韓国語の〈-ko iss-〉は開始点と終了点¹⁷を持つ事象内部のインターバルであることを表すため、現在と切り離された過去の局面を指すことができない¹⁸。

次節では特定の表現との共起をみることで上の一般化が妥当であることを示す。

3.3 〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の相補性

3.3.1 主体の運動を基準に

本節では〈-ko iss-〉や〈-e iss-〉が一見同じ意味の結果状態を表しているようにみえる場合についてみていく。そしてそれぞれの形式が表している意味の違いを特定の表現との共起の可否を基準に説明する。

まず動作が主体的に行われるかどうかによって〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の表れに違いが出てくる場合がある。

(28) yenghuy-ka cenchel-ey tha-[ko iss/e iss]-ta.

ヨンヒ-が 電車-に 乗っ-てい-る

「ヨンヒが電車に乗っている。」

(28) は、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉どちらの場合でもヨンヒが電車に乗るという動作の後、電車に乗っている状態にあるということを表している。

ところが同じ tha-ta 「乗る」でも以下のように違う振る舞いをみせることがある。

(29) yenghuy-ka cacenke-ey tha-[ko iss/*e iss]-ta.

ヨンヒ-が 自転車-に 乗っ-てい-る

「ヨンヒが自転車に乗っている¹⁹。」

〈-ko iss-〉は自転車に乗るという動作の後、乗っている状態であることを表しているが、自転車の場合は電車とは異なり主体の働きかけがないと動くことができない。この場合、

¹⁷ ここで〈-ko iss-〉付くような動詞が持つ終了点というのは、 $s < f < r$ である動詞では r 、 $s < f = r$ である動詞では f を指している。

¹⁸ しかし韓国語でも *cic-ko iss-ta* (建てている) や *pangeha-ko iss-ta* (防衛している) など特殊な一部の動詞においてはパーフェクトの意味を表すようにみえる場合がある

¹⁹ ただし、「自転車で乗っている」という文で〈-e iss-〉が使える場合がある。例えば、ヨンヒが自転車をこいでいるという動作を前提にしているのではなく、自転車に乗れない子どもが単に静止している自転車に乗っている時など、動くということを前提にしていない場合である。

〈-e iss-〉は使えない。

つまり (28) のように主体の働きかけを必要としない電車の場合には 〈-ko iss-〉も 〈-e iss-〉も後接できるのに対して、(29) のように主体の働きかけがないと動くことが出来ない自転車の場合には 〈-ko iss-〉しか後接することができない。

主体の働きかけと 〈-ko iss-〉や 〈-e iss-〉の関係については次の memchwu-ta 「止まる」という動詞の例からも確認することができる。

(30) sikyey-ka memchwu-[??ko iss/e iss]-ta.

時計-が 止まっ-ている

「時計が止まっている。」

(30) は時計が止まった後の結果状態を表しているが、時計が止まった後再び主体である時計が自ら動き出すということは考えにくい。この場合 〈-e iss-〉しか後接することができない。

ところが同じ memchwu-ta 「止まる」でもバスの場合、〈-ko iss-〉、〈-e iss-〉いずれの形式も後接することが可能である。

(31) pesu-ka memchwu-[ko iss/e iss]-ta.

バス-が 止まっ-ている

「バスが止まっている。」

(31) はバスが止まるという動作の後、バスが止まっている状態にあることを表している。これは例えば以下のように考えることができる。

1. バスの運転手が客を乗せるために、バス停留所にバスを止めているのを見ての発話であってもよい
2. 何日間も動かずに同じ場所に止まっているバスを見ての発話であってもよい

1. の場合だと、バスの運転手が客を乗せた後再び動き出すまでを想定しやすいが、2. の場合はずっと止まって動かないバスとして見なしてもよい。この場合には、〈-ko iss-〉や 〈-e iss-〉どちらの形式も後接することができる。

以上で述べた tha-ta 「乗る」と memchwu-ta 「止まる」の例から以下のことがわかった。

- 自転車のように動作に主体の働きかけを必要とする場合には、〈-e iss-〉を用いることができない
- 時計のように自ら再び動き出すことが考えられにくい場合には、〈-ko iss-〉を用いることができない

このことゆえに「〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が動詞の語幹に後続し、動作が終わった後の「結果状態」の意味を表す場合、一見同じ意味を表しているようにみえる場合でも〈-ko iss-〉は主体によって「維持」されていることを表しており、〈-e iss-〉は変化した後の「結果状態が持続」されていることを表している」ということが考えられる。次に、副詞との共起で意味の差がでることをみる。

3.3.2 副詞との共起可否を基準に

まず、以下の例文を考えてみよう。

- (32) yenghuy-ka pyek-ey kitay-[ko iss/e iss]-ta.

ヨンヒ-が 壁-に もたれ-ている

「ヨンヒが壁にもたれている。」

〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉のどちらを用いた場合でもヨンヒが壁に寄りかかった結果、ヨンヒの体が壁によりかかっている状態を見ての発話であり、〈-ko iss-〉の場合でもここではヨンヒが壁の方に向かって寄りかかっているところであることを表しているわけではない。

そして、これも過程の部分だけを修飾するとされる chenchenhi「ゆっくり」との共起性をみるとその意味の違いは一目瞭然である。

- (33) yenghuy-ka pyek-ey chenchenhi kitay-[ko iss/*e iss]-ta.

ヨンヒ-が 壁-に ゆっくり もたれ-ている

「ヨンヒが壁にゆっくりもたれている。」

〈-ko iss-〉が chenchenhi「ゆっくり」と共起すると sf 間の過程の部分を取り出すことができる。つまり〈-ko iss-〉が chenchenhi「ゆっくり」に修飾され、主体が壁に向かって寄っている動作の局面が読み取れるのである。一方、〈-e iss-〉は chenchenhi「ゆっくり」と共起しないことからわかるように sf 間を表現するような副詞とは共起しない。

- (34) a. ??yenghuy-ka cengsin-ul ilh-ko pyek-ey kitay-ko iss-ta.

ヨンヒ-が 気を 失って 壁-に もたれ-ている

「ヨンヒが気を失って壁にもたれている。」

- b. yenghuy-ka cengsin-ul ilh-ko pyek-ey kitay-e iss-ta.

ヨンヒ-が 気を 失って 壁-に もたれ-ている

「ヨンヒが気を失って壁にもたれている。」

〈-ko iss-〉が表す fr 間が主体によって「維持」されている局面であることは、(34a) のように主体の力を必要としない cengsin-ul ilh-ko「気を失って」と共起すると不自然な意

味になることから確認できる。

また kitay-ta「もたれる」は、Yang Jeongseok (2004) でも指摘されているように自動詞とされているが他動詞的用法も持っており、「体を」などの目的語をとることもできるが、その場合には<-e iss->を使うことができない。

これまでは<-ko iss->や<-e iss->が同じ動詞の語幹に後続し表される「結果状態」の意味が同じ意味にみえる場合について考察を行った。そして、「過程」の局面から一部分を表すことができる chenchhenhi「ゆっくり」などと共起できるかどうかということから<-ko iss->が sf 間である場合には「過程」の局面を表していることがわかった。さらに、主体の力を必要としない cengsin-ul ilh-ko「気を失って」とは共起できないことから fr 間である場合には主体によって維持されている局面を表していることが明らかになった。

しかし、次節で取り上げる ieci-ta「つながる」のように「過程」の局面から view を制限して一部分を表すとされる副詞との共起が可能であっても実際には「過程」の局面を指すことができない場合がある。

3.3.3 主観的移動

本節では、ieci-ta「つながる」という動詞の語幹に<-ko iss->が後続した場合に「主観的移動²⁰」という概念に関連付けて考えることで<-e iss->が ieci-ta「つながる」に後続した場合の意味と区別できることを説明する。

田中・松本(1997: 207)によれば、移動表現について主語で表されている物体の位置、範囲などが移動動詞を用いて表現されており、この場合主語は実際に移動するわけではない。つまり、主語で表された物体にそって主語以外の何らかの移動物の移動が想定され、それが移動動詞によって表現されていると述べている。これは Langacker (1987) で指摘されているように、主語で表されている物体を認識する際に認識者の心に想定される移動がもとになってこのような表現ができることを指している。そして、このような移動は「主観的移動 (subjective motion)」(Langacker 1987:173)と呼ばれている。

この種の表現をここでも Langacker (1987)、田中・松本 (1997) に従い「主観的移動」と呼ぶことにする。

では次の文を考察してみよう。

- (35) kuccok mau-lo kanun kyeykok-ulo phocang-tolo-ka ieci-[ko iss/e iss]-eyo.
 そちら 村に 行く 溪谷に 舗装道路が つながっています
 「そちらの村にいく溪谷に舗装道路がつながっています。」

²⁰ 田窪教授の指摘による。

これは、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉どちらの形式が後続してもつなぐという状態変化の結果、今つながっている道路の「結果状態」を表しており、〈-ko iss-〉でも舗装道路が今つながりつつあるという局面を表しているわけではない。

以下は副詞 kyeyso²¹ 「ずっと」との共起によって意味の違いがわかる場合である。

(36) kuccok mau²²-lo kanun kyeykok-ulo phocang-tolo-ka kyeyso²³ ieci-[ko iss-/?e iss]-eyo.

そちら 村-に 行く 溪谷-に 舗装-道路が ずっと つながっ-て-います

「そちらの村にいく溪谷に舗装道路がずっとつながっています。」

〈-ko iss-〉では kyeyso²⁴ 「ずっと」が共起すると話者または認識者の心に舗装道路が村までつながっているという動きが想定しやすいのに対して、〈-e iss-〉は「ずっと」で舗装道路がつながるとい動きが想定しにくくなる。つまり、これは主体が道路にそって移動する²⁵動きが話者の心の中に想起されることで「過程」を表しているように思われるのである。

このように、実際には「過程」の局面を表すことができない場合でも主体あるいは話者の心の中に移動が想起され「過程」の局面を表している点で、この現象は「主観的移動」とみることができる。

以上から、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉が後接するパターンやそれぞれの形式が表す機能については以下のことがいえる。

- 「動詞の語幹 + 〈-ko iss-〉」で、過程・維持²⁶の局面を部分的に取り出す。
- 「動詞の語幹 + 〈-e iss-〉」で、状態変化後の状態を部分的に取り出す。

このことは次のように図示することができる。

	s	f	r
-ko iss-		過程	維持
-e iss-			結果持続

図1 局面-1

しかし、すべての動詞が以上で述べたように「過程・維持」と「結果持続」ではっきり

²¹ 村までの道が発話者の目線に沿って移動していることを表す場合でもよい。

²² 浜之上 (1991) では、本論文で「維持」と呼んでいる局面について以下のように述べている。それは、動作が終了してその状態が保持されていると考えられるがその状態自体を維持するために動作の主体が力を使い続けており、動的なニュアンスが与えられているという点では「進行相」と言えないこともできないであろうという内容である。しかし、動作の主体が力を使い続けるという「保持」の意味に関しては積極的な根拠をあげていない。浜之上 (1991) のこのような観察が本論文のアプローチとどう異なるかについては充分検討する必要があるだろう。

区別できるわけではない。

3.4 anc-ta「座る」類について

ここでは、状態変化後の状態が次の状態変化を迎えるまでその状態が主体によって維持されているように見える「yel-ta（開ける）」類と「anc-ta（座る）」類の動詞について考える。Igarashi and Gunji (1998) では、「座る」が「開ける」と同じく「始める」や「続く」などをつけて f と r 間の局面を表すことができるということから、「座る」が持つ r の可視性を「開ける」が持つ r の可視性と同じように高く設定している。しかし韓国語では、「anc-ta（座る）」が持つ「結果状態」の局面を「yel-ta（開ける）」がもつ「結果状態」の局面と同じように考えることができない。本節では、「anc-ta（座る）」や「yel-ta（開ける）」が Igarashi and Gunji (1998) で示されている日本語の場合と違いがあることについて適切な説明を与える。

「yel-ta（開ける）」、「anc-ta（座る）」、「kitay-ta（もたれる）」はこれまでの分析を基準に考えると、これらの動詞は皆「結果状態」を指す場合にその状態が保たれるためには主体性が必要とされるケースであると考えられる。ところが「yel-ta（開ける）」、「kitay-ta（もたれる）」には〈-ko iss-〉が後続するのに対して、「anc-ta（座る）」には〈-e iss-〉が後続しそれぞれの動詞がみせる振る舞いは異なっている。

以下、「anc-ta（座る）」、「kitay-ta（もたれる）」のように人の姿勢を表すような動詞を「姿勢動詞」と呼ぶことにしよう。ここでは姿勢動詞を大まかに二種類に分けて考える。

(37) a. 〈-ko iss-〉をとるものには、

例えば、mom-ul kitay-ta「体をもたれる」²³、heli-lul kwuphi-ta「腰を曲げる」、kokay-lul kiwuli-ta「首をかしげる」などがある。

b. 〈-e iss-〉をとるものには、

例えば、anc-ta「座る」、se-ta「立つ」、nwup-ta「横になる」などがある。

これらの動詞はそれぞれ他動詞、自動詞という違いはあるものの、どちらも主語の位置にくるものが動作主にもなる一方対象にもなれるということでは違いがない。また、これらの動詞（あるいは動詞句）は〈-ko iss-〉あるいは〈-e iss-〉が後続し、「結果状態」を表す動詞類でもある。この場合、どちらの動詞類も結果状態で主体性が残っているように見える。例えば、(37a) では主体によって維持されている状態になり、その後主体によって再び元の状態に復旧されるということから「結果状態」においては主体の動作性が残ってい

²³ しかし、mom-ul kitay-ta「体をもたれる（逐語訳）」類の動詞は目的語までを含む動詞句が多い。

るのだと考えることができる。また、(37b) の場合でも主体の働きかけによって座った状態になり、その後主体の動きによって「立つ」という状態にもなれるので anc-ta「座る」も kitay-ta「もたれる」と同じく「結果状態」で主体の動作性が残っているようにみえるのである。

しかし、anc-ta「座る」、se-ta「立つ」などの動詞には <-e iss-> が付くということは、状態変化後の状態を主体によって維持されている状態であるとはみなされていないということを示す。つまり、これは結果状態で主体性が残っているような時でも anc-ta「座る」、se-ta「立つ」などの動詞が表す結果状態を韓国語では「主体によって維持されている事象」とみなしていないということを表している。

影山 (1993) は、意味的にほぼ同一の概念であってもそれを表す動詞の非対格性は言語によって異なると述べている。そして、語彙概念構造と外界の物理的ないし心理的把握の仕方が必ずしもそのまま対応しないことを指摘している。例えば日本語でも「死ぬ」と「死亡する」はほぼ同じ意味を表す動詞であるが、「死ぬ」は「死ね」など命令形にして表現できるのに対して「死亡する」は「*死亡しろ」とは言えないという現象がある。あるいは、英語の例で have と own の違いをみても、have は受け身にならない (*That property is had by John.) のに対して own は受け身になりえる (That property is owned by John.)。このように、類似した意味の動詞でも異なった振る舞いをみせることがある (影山 1993: 72)。

つまり、以下のことが言える。

- 韓国語では mom-ul kitay-ta「体をもたれる」類の動詞と anc-ta「座る」や se-ta「立つ」類の動詞が「結果状態」を表す場合に類似した意味構造をもっているようにみえてもそれぞれの動詞類は異なった語彙的情報をもっている。これは、mom-ul kitay-ta「体をもたれる」類では <-ko iss-> が後続し、anc-ta「座る」や se-ta「立つ」類では <-e iss-> が後続するということから裏付けられる。

また、mom-ul kitay-ta「体をもたれる」類の動詞と anc-ta「座る」の違いは次の例からも説明できる。

- (38) a. ecey twu-sikantongan uyca-ey anc-[??ess /e iss]-ta.

昨日 2時間 椅子に 座った/座っていた

「昨日2時間、椅子に座つ [??た/っていた]。」

- b. 2sikantong pyek-ey mom-ul kitay-ess-ta.

2時間 壁に 体をもたれた

「2時間、壁に体をもたれた。」

(38a) で示しているとおり「2 時間座った」の文は容認度が低く、「2 時間座っていた」にしなければならない。元の状態に復旧することが期待される（復旧すると思われる、あるいは基本状態ではないと思われる）事象を表す場合、時間表現が共起可能である。あるいは逆に、時間表現が可能であるということは、一時的な仮の状態であると解釈されたいと考えられる。つまり、(38a) のように「座る」などの動詞が時間表現と共起しにくいのは元の状態に復旧することが期待される「一時的」な状態ではなく、ただ状態変化後の状態を表している。本論文では、このように復旧することが期待されないような意味を表す姿勢動詞を特に「基本姿勢動詞²⁴」と呼ぶ。

一方 (38b) は問題なく時間表現と共起できる。これは、「体をもたれる」などの動詞が「基本姿勢」ではなく元に復旧することが期待される「一時的」な姿勢を表しているからであるといえよう。

つまり、姿勢動詞の一部が〈-e iss-〉とだけ結合されるのは、anc-ta「座る」、se-ta「立つ」、nwup-ta「横になる」などの動詞は元の状態に復旧することが期待される「一時的」な状態ではなく、「基本姿勢」を表しているからである。一方、韓国語は日本語とは異なり「座っている」という状態が主体によって維持されている姿勢ではなく、状態変化後の局面として捉えているということを示している。

次節では、Igarashi and Gunji (1998) の枠組みを使って動詞が持っている時間の局面を sfr という記号で示すとともに〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉についてのそれぞれの意味の定式化を試みる。

3.5 Igarashi and Gunji (1998) の枠組みへの定式化

ここまでの考察に基づいて、〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の意味を考えると Igarashi and Gunji (1998) の枠組みのみで韓国語の二種類のアスペクト形式を定式化することは難しい。

本論文ではこれまで〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉について考察を行った。その結果、〈-e iss-〉が表す fr 間というのは状態変化終了後の状態として、単なる状態変化を受けた対象が存在していることを表している。一方、〈-ko iss-〉が表す fr 間は主体によって維持されている事象として認識されているということを明らかにした。二種類のアスペクト形式を持っている韓国語を定式化するためには Igarashi and Gunji (1998) で用いられる s, f, r をそのまま適用することはできず、r も二種類の r があると考えなければならない。そこで以下のように整理する²⁵ことができる。

²⁴ 田窪教授の指摘による。

²⁵ なお、Igarashi and Gunji (1998) で示しているように可視性が違う r である、あるいは、r が二つあると考えてもよい。r の可視性が 1 であれば〈-ko iss-〉が後続し、r の可視性が 0 であれば〈-e iss-〉が後

1. 「動詞の語幹 +〈-ko iss-〉」の場合の $f < r$ の r は r^1
2. 「動詞の語幹 +〈-e iss-〉」の場合の $f < r$ の r は r^0

3.3 節で示した図を以下に修正する。

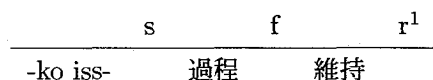


図 2 局面-2

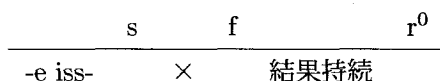


図 3 局面-3

4 おわりに

本論文では、韓国語のアスペクト意味を表す形式である 〈-ko iss-〉 および 〈-e iss-〉 が表す意味や両形式が後続する条件を動詞がもつ語彙の意味と関連づけて考察を行った。そして、〈-ko iss-〉 は「過程・維持」の意味を表しており、〈-e iss-〉 は「状態変化を被った対象が変化後の状態にある」という意味を表すと結論付けた。また状態変化動詞に 〈-ko iss-〉 あるいは 〈-e iss-〉 が後続するためには、主体の振る舞いが問題になっていることがわかった。しかし本論文では「動詞の語幹 +〈-ko iss-〉」で「反復」の意味を表す場合や「開始点²⁶」の前の局面の意味を表すようにみえる場合については触れることができなかった。まず、「反復」の意味は単に動詞が持つ情報からその解釈が得られることはなく、また別にイベント構造を考えなければならないと考えている。次に「開始点」の前の意味を表す場合については、なぜ到達動詞 (achievement verb) 全般ではなく tochakha-ta (到着する)、tah-ta (着く) など一部の到達動詞にのみ開始時点の前の解釈ができるのかを中心に考える必要があると思われる。このような問題に関しては今後の課題としたい。

続する。そして 〈-ko iss-〉 で表す事象の r はまた可視性を使って細分類することができるが、〈-e iss-〉 で表す状態の r は実際に言語外の事象が復帰可能である状態であっても 〈-e iss-〉 は対象の変化後の状態が存在していることだけを表しているので、可視性によって細分類することはない。また、ここで用いられている r^0 は復帰時点である reset time がいないことを表す。しかし韓国語には結果状態が終わる時点までしか表すことができずパーフェクトを表す用法がないため、 r^0 を用いて結果状態までの時点と結果状態以降の時点に分けている。

²⁶ tochakha-ta (到着する)、tah-ta (着く) などの achievement 動詞では、〈-ko iss-〉 が後続すると到着する時点 (開始点) よりも前の段階の意味を表す。

付録：動詞の分類

$s < f$ and $f < r^1$ である状態変化他動詞の場合

(mwun-ul) yel-ta 「(ドアを) 開ける」	(os-ul) pes-ta 「(服を) 脱ぐ」
(mwun-ul) tat-ta 「(ドアを) 閉める」	(mwulken-ul) sit-ta 「(荷物を) 乗せる」
(mwun-ul) camku-ta 「(ドアを) 閉ざす」	(cenchel-ey) tha-ta 「(電車で) 乗る」
(os-ul) ip-ta 「(服を) 着る」	

〈-ko iss-〉が後続、 s と f の間には「過程」、 f と r の間には「維持」を表し、両義的意味になる。この場合 〈-e iss-〉は用いられない。

$s < f$ and $f = r$ である動作動詞の場合

ket-ta 「歩く」	chwumchwu-ta 「踊る」
talli-ta 「走る」	nol-ta 「遊ぶ」

〈-ko iss-〉が後続し sf 間の「過程」の意味のみ表すことができる。この場合 〈-e iss-〉は用いられない。

$s < f$ and $f < r^0$ である動詞の場合

nok-ta 「溶ける」	kkayci-ta 「割れる」	tteleci-ta 「落ちる」
pwuseci-ta 「壊れる」	mangkaci-ta 「壊れる」	

〈-ko iss-〉が後続して sf 間では「過程」、〈-e iss-〉が後続し fr 間では「結果持続」の意味になる。

$s = f$ and $f < r^1$ である到達動詞の場合

ca-ta 「寝る」	(kapang-ul) tu-ta 「(かばんを) 持つ」
sal-ta 「住む」	(pwul-ul) kku-ta 「(電気を) 消す」
kitali-ta 「待つ」	

〈-ko iss-〉が後続し fr 間では「維持」の意味を表す。〈-e iss-〉は後続することができない。

$s < f$ and $f < r^0$ である移動動詞の場合

talana-ta「逃げる」	tolaka-ta「帰る」	ka-ta「いく」
tomangka-ta「逃亡する」	o-ta「くる」	olu-ta「登る」

〈-ko iss-〉が後続し sf 間で「過程」の意味を、〈-e iss-〉が後続し fr 間で「結果持続」の意味を表す。

s < f and f < r⁰ である動詞の場合

kitay-ta「もたれる」	twutuleci-ta「目立つ」	tah-ta「接する、着く」
sosokha-ta「所属する」	cengciha-ta「停止する」	
memwulu-ta「泊まる」	ie-cita「つながる」	

〈-ko iss-〉と〈-e iss-〉の両方の形式が後接可能である。〈-ko iss-〉が後続して fr 間の「維持」の意味を、〈-e iss-〉が後続して「結果持続」の意味を表す。

s = f and f < r⁰ である動詞の場合

nwup-ta「横になる」	anc-ta「座る」
tulenwup-ta「横たわる」	se-ta「立つ」

〈-ko iss-〉は後続せず、〈-e iss-〉だけが後続可能である。〈-e iss-〉が後続すると、fr 間で「結果持続」の意味を表す²⁷。

s = f and f < r⁰ である動詞の場合

makhi-ta「塞がる」	mwuthi-ta「埋もれる」	yelli-ta「開ける」
kamki-ta「巻かれる」	silli-ta「載せられる」	

〈-ko iss-〉は後続せず 〈-e iss-〉だけが後続し、fr 間で「結果持続」の意味を表す。

s = f and f = r であるか、あるいは、sfr のそれぞれの時点がはっきりしないためそれぞれの局面が決められないような動詞

²⁷ これらの動詞は姿勢を表しているので、「姿勢動詞」と呼ぶ。

tey-ta「やけどをする」	mac-ta「合う、正しい」	soksangha-ta「気に障る」
nayki-ta「気が向く」	mwulli-ta「噛まれる」	
tulki-ta「ばれる」	pwuchi-ta「手にあまる」	

これらの動詞には〈-ko iss-〉、〈-e iss-〉のいずれの形式も後続することができない。

参考文献

【日本語の文献】

- 影山 太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 金田一 春彦. 1976. 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 工藤 真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房.
- 田窪 行則・三藤 博・澤田 浩子. 2004. 「日本語テンス・アスペクトの2階層表示分析」
ms.
- 田中 茂範・松本 曜. 1997. 『空間と移動の表現』 日英比較選書 6、研究社出版.
- 野間 秀樹・金 珍娥. 2004. 『Viva!中級韓国語』 朝日出版社.
- 野間 秀樹・村田 寛・金 珍娥. 2004. 『ぶち韓国語』 朝日出版社.
- 浜之上 幸. 1991. 「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第138輯、1-93.
- 浜之上 幸. 1992. 「現代朝鮮語の「結果相」=状態パーフェクト」『朝鮮学報』第142輯、
41-108.
- 森山 卓郎. 1988. 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院.
- 油谷 幸利. 1978. 「現代朝鮮語の動詞分類」『朝鮮学報』第87輯、4-35.

【英語の文献】

- COMRIE, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DOWTY, David R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- IGARASHI, Yoshiyuki and Takao GUNJI. 1998. "The Temporal System in Japanese." Takao GUNJI and Kôiti HASIDA. (Eds.), *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*. Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers, chap. 4, 81-97.
- LANGACKER, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- VENDLER, Zeno. 1967. Verbs and times. In Zeno VENDLER, *Linguistics in philosophy*. New York: Cornell University Press, 97-121.

【韓国語の文献】

- Ko Yengkun. 2004. 『hankwuke-uy sicey・sepep・tongcaksang (韓国語の時制・敘法・動作相)』 Thayhaksa.
- Lee Chengmin. 1994. 「simlitongsa-uy sang-ey kwan-han mwuncey(心理動詞の相に関する問題)」『aysan hakpo』第15号、1-23.

- Yang Jeongseok. 2004. 「'-ko iss-'kwa '-e iss-'uy sangposeng yepwu kemtho-wa kwumwun kyuchik kiswul（'-ko iss-'と'-e iss-'の相補性の検討と構文規則技術）」
『hankul（ハングル）』第266号、105-137.

On the Difference of Aspectual Meaning between Korean ‘-ko iss-’ and Japanese ‘-te iru’

Kim Kyung-ae

Abstract

The purpose of this paper is to examine the aspectual forms in Korean and Japanese. These are ‘-ko iss-’, ‘-e iss-’, in Korean, and ‘-te iru’ in Japanese. Fundamentally ‘-ko iss-’ and ‘-te iru’ express durative meaning, that is, the duration of action, and of a resultant state. However, the two forms behave differently when attached to ‘state-change verbs’. In this paper, we will discuss these differences.

‘-ko iss-’, ‘-e iss-’ and ‘-te iru’ forms which express partial aspect share similar meaning, except when they are used with ‘state-change verbs’. ‘State-change verbs’ must be differentiated into intransitive and transitive verbs, because in Korean these two aspect forms behave differently depending on the type of the verb they attach to.

First, we examine the case of resultant state meaning. In Japanese, ‘-te iru’ can be attached to verbs irrespective of their transitivity in expressing this meaning (cf. (doa-wo) akeru, (doa-ga) aku).

In contrast, in Korean, transitive verbs are followed by ‘-ko iss-’ to express the resultant state, while for intransitive verbs ‘-e iss-’ is used.

Next we consider adverb modification: ‘verb + -ko iss-’ can co-occur with both adverbs modifying manners and adverbs modifying resultant state, whereas ‘verb + -e iss-’ co-occurs only with the latter.

The Japanese ‘verb + -te iru’ construction can express a progressive event, a resultant state of event, and so-called “perfect” meaning. The Korean ‘-ko iss-’, however, expresses only the first two meanings, and cannot have the “perfect” meaning.

(受理日 2006年7月31日)